線放射療法を併用せしもの1例あり。6例共に拔去に成功せり。以上の症例により單なる聲門下腔粘膜の腫脹發赤による拔去困難を來す場合は、Ag NO_3 による腐蝕收斂法續行が最も有効なるを知れり。尙挿管日數は、最長氣管切開後337日、最短42日目なりき。(財前抄)

外傷性迷路震盪症の鑑定例に就て

大藤　敏三

耳鼻咽喉科 13 卷 9 號 639 頁

26歳女、左頭部に暴力による毆打を受け、眩暈、衂血あり、爾後左耳鳴、難聽あり。3ケ月後、再び子供を背負ひたる儘後方より突き飛ばされ、毆打を受け意識消失せり。恢復後、持續性激烈なる頭痛、耳鳴、兩側聾あるも、外聽道、鼻咽腔よりの出血を認めず。眩暈なし。診るに、鼓膜所見正常、聽力は兩側聾、再三聽力檢査を行へるも成績一定、ロンバール現象陰性(詐病を檢す)。回轉性後眼震あり、副症候として輕度の眩暈、頭痛あるも運動失調無し。溫度性眼震(+)、副症候(−)。腦神經麻痺症狀なし。身體平衡正常、Labyrinthstruz の所見無し。聽器の「レ」線像正常。「ステレオ」にて骨折所見陰性。血液、腦脊髓液ワ氏反應陰性。以上の病歷、耳科學的所見より外傷性迷路震盪症にして、詐病、外傷性神經症、迷路徵毒(耳硬化症、進行性難聽)等は之を除外し得。(二又抄)

麻疹を疑はしめたる「ムルチン」の一例

田端　悅治

耳鼻咽喉科 13 卷 9 號 635 頁

20歳女、最初に右側、1週間後に左側の上顎竇根治手術を受く。左側手術後4日目頃輕度の「アンギーナ」を併發せる爲、2日間「ムルチン」2 cc づつを上膊皮下に注射せり。然るにその翌朝顏面並に上膊に粟粒大乃至米粒大の鮮紅色發疹あるに氣付き、午後には胸部、背部にも認められたり。發疹は次第に全身に及び癒合し尋麻疹を呈せるも瘙痒感殆んどなく、粘膜症狀の增惡なし。發疹の狀態は自覺症狀共に麻疹の發疹に酷似し、血液像に於ては高度ながら白血球減少を示し、「エオジン」嗜好細胞の減少による麻疹を疑ふに充分なりしが、粘膜症狀少なく、全身狀態も侵されず、尿の「ヂアゾ」反應常に陰性にして、既往に麻疹を經過せる事等により麻疹を否定し得たり。毎日 25% 葡萄糖 50cc「ビトン」2cc の注射を 10 日間續け、發疹は約1ケ月にして跡かたもなく消失せり。(松崎抄)

石田系「マウス」癌腫の實驗的研究 (IV)
癌腫「マウス」血液の健康「マウス」皮下への接種に就て

岡田　侃三

皮膚科紀要 35 卷 2 號(昭和 15 年 2 月)

著者は Tumorfrei の材料による Tumorübertragung とし、石田系癌腫を負へる「マウス」の血液を、健康「マウス」皮下に注入し、原腫と同樣の腫瘍を生ずるや否やの實驗に關し、實驗材料及び方法を述べ、且、其の實驗成績を表示し、而して、1) 52 頭中3頭に腫瘍發生を認め、2) 發生せる腫瘍は原腫瘍とは、組織學的に同像にして、且健康「マウス」へ移植せらるゝ時は、原腫と同樣の腫瘍を、略同樣の移植率に於て、發生せしめ得たり。3) 發生率は、極期にて大なる腫瘍を荷へる「マウス」の血液程多く、又生存日數長きもの程高し。4) 採血「マウス」の腫瘍轉移の有無は無關係にして、5) 注入血量の多寡については 0.6cc 以下は陰性、0.6cc 以上は陽性を認めたり等と結論せり。(楊抄)